

映画でURの住民追い出し問う

東京・日野市にある高幡台団地73号棟、UR(旧住宅公団)管理のこの団地の取り壊しが通告されたのは四年前。理由は耐震性不足。この問題をテーマに描くドキュメンタリー映画「さようならUR」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2011のスカパーノID EHA賞を受賞しました。監督の早川由美子さんのお話をききました。

と仲間たち」でJCJ(日本ジャーナリスト会議)賞を受賞。この映画の上映で全国を回り、社会運動にかかわる集会などしながら仕事をしているのが実情です。「低家賃の公共住宅がたくさんあったら、生活はどんなに楽になるか――」

月間、欠かさず参加、不当な追い出しに明るく、元気にたたかい続ける住民たちと親交を深めてきました。立退き期限を過ぎても住み続ける住民は七家族。URの突然の取り壊し

とりの素顔を、ていねいに写し出していきます。夢い抱いて四十年に越してきた時の様子を語る女性、「この団地がふるさと」と話す青年、追い出しのストレスに悩まされる男性、退去をめぐる家庭内での意見の相違など。背景に浮かび上がってくるのはURの団地削減方針、そして国の民営化路線。「戦後満州から引き揚げてきた方や沖縄の方など、国の政策で住む所まで奪われてきた切なさがよくわかります。私自身の未来をみる思いでした。良質で低家賃の公共住宅を、たくさん建てるのはいいです」



ドキュメンタリー映画監督

「さようならUR」

早川由美子さん

こんにちは

早川さんはイギリス留学中、反戦運動をテーマに監督・制作したデビュー作「ブライアン

どで若者の姿が少ないことに気がつきます。「厳しい労働実態の中で、社会問題と向き合う余裕もないのですね」住宅問題も深刻だと早川さんはいます。実は早川さん自身、居候生活をし

そんな時に住宅問題のついでで出会ったのが「高幡台団地73号棟に住み続けたい住民の会」の村田栄法さん(立川支部の村田公子さんの夫君)。以来、毎週行なわれる「住民の会」に七か

通告に驚く住民たち。本当にこの建物は危いのか、直すことはできないのか。疑問を持った住民は情報公開請求で資料を請求しますが、構造設計図はすべて墨塗り。映画は住民たち一人ひ

住民たちは、URが立退きを求めて提訴した裁判も闘っています。websites: www.petiteadventurefilms.com